

ふくやま美術植物園 ～アートにみる四季の花々～

2017年4月5日(水) – 6月25日(日)

会場：常設展示室

※月曜休館 ただし5月1日(月)は開館

※学芸員によるギャラリートーク 4月21日(金)、5月19日(金)、6月18日(日) 午後2時より

日本人と花

春夏秋冬、四季がはっきりと変化する日本では、その折々の植物が多彩な色と形の花を咲かせ、私達の目を楽しませてくれる。こうした花々は観賞の対象となるだけでなく、食用や薬用、染料に用いられるなど生活と結びつき、あるいは文学・美術・音楽など様々な芸術文化にも取り上げられてきた。

改めて考えてみると、花は植物がその受粉を促すために、鳥や虫たちに働きかける器官として発達したものである。鳥や虫たちは花の色や形に誘われ、香りや蜜に引き寄せられて、植物の生殖を助ける。このように植物にとって合理的な目的にしたがって発達した花を、人はいつの頃からか美しいものとして自然の中から見出し、愛でたり、歌に詠んだり、思いを託して人に贈ったり、あるいは身近に飾って暮らしてきた。花の色や形の生む美しさが広く共感を呼ぶものとして人の暮らしと密接にかかわり、豊かな文化を生み出してきた。

そうして花は、美術作品のモチーフとしてもやはり時代を越えて好まれてきた。絵画に描かれ、装飾の文様となり、日本の美術を彩ってきたのである。

美術作品に表された花

草花をメインに鳥や虫なども加えて描いた絵画は、花鳥画と総称される。東洋絵画の伝統的な画題の一つであり、日本では中国の宋元画の影響を受けて、南北朝時代の頃から水墨花鳥画が描かれるようになった。室町時代には彩色された花鳥画が描かれ、桃山時代には絢爛な金碧障壁画に、また江戸時代には琳派による装飾性の強い花鳥画なども制作されてきた。

明治期、本格的に西洋絵画の技法や理念が押し寄せるようになると、洋画（西洋絵画を做って描いた油彩画）を手掛ける日本人画家たちが急速に増加するとともに、日本画の領域においても近代化が進められて従来にはなかった表現が試みられるようになる。日本の近現代絵画は洋画・日本画ともに、西洋絵画を取り入れようとした作品、西洋絵画の影響を受けながらも日本的な独自性を追求した作品、中国や日本の古典を見直そうとした作品、画家の個性や内面を色濃く反映した作品など様々な展開を見せながら、花もまた身近で主要なモチーフの一つとして、今日まで多彩な表現によって描かれ続けてきた。工芸の領域においても、古来より陶芸・金工・木工など種類を問わず、花は簡略化・象徴化された文様となったり、あるいは具象的な姿で直接表現されたりしつつ、しばしば作品に登場してきた。

当館の所蔵品を見渡しても、花をモチーフにした作品は実に数多く存在する。本展ではそれら作品群を、花の種類ごとおよび季節ごとに分類し、その植生にまつわる豆知識も交えて紹介する。計20種類の花が描かれた、36人の作家による36点の作品を展覧し、百者百様の花の表現をご覧頂くものである。

春の花（ツバキ、サクラ、チューリップ、バラ、ポタン）

【サクラ／桜／Cherry】

一般にサクラと呼ばれているのはバラ科サクラ属の落葉低木。サクラ材は良質、堅牢な特質から主に家具や建築材などとして、あるいは浮世絵の版木としても用いられた。サクラといえばお花見が連想されるが、現在、全国に植栽され一般的に観賞されているのはソメイヨシノ（染井吉野）である。明治初年頃に東京・染井（現在の豊島区駒込）の植木屋から広が



35. (左) 藤井松林《紅梅春鶯図》【ウメ】
2. (右) 金島桂華《椿》【ツバキ】



4. 藤井治子《花見》【サクラ】



5. 白瀧幾之助《チューリップ》
【チューリップ】



7. 林武《薔薇》【バラ】



12. 作者不詳《姫谷焼色絵牡丹文皿》【ボタン】



14. 山口華楊《芍薬》【シャクヤク】



17. 緒方亮平《紫陽花》【アジサイ】

り始めたとき、生長が早く花つきがよく、華麗に咲くために普及していった。ソメイヨシノの登場以前は、赤茶色などの葉と同時に花が開くヤマザクラが主流で、奈良の吉野山やこれを移植したと伝えられる京都の嵐山が、古くから続く名所として名高い。

福山出身、院展を舞台に活動した日本画家・藤井治子の《花見》(no.4)では、満開のサクラのなか、艶やかな舞妓たちが花見に興じている。サクラは、現代の定番品種・ソメイヨシノだろうか。まさに「日本の春」を画面いっぱいに体現したような作品である。

【バラ／薔薇／Rose】

バラ科バラ属の植物は、常緑または落葉低木で、蔓性の種類もある。世界的にバラの栽培熱は高く、これまでに膨大な園芸品種が作出されてきた。現在でも毎年、世界中で約200の新品種が発表されているという。西洋を連想させる花だが、そのルーツは意外にも中国・日本をはじめアジア各地に分布する、8種ほどの原種にあるといわれる。用途としては、花弁から精油を抽出したローズオイルが香水の原料やアロマセラピーに用いられるほか、農薬のかかっていない花弁をエディブル・フラワーとして生食したり、ジャムや砂糖漬けに加工したり、乾燥させてハーブティーとして飲むこともある。ちなみにバラは、福山市の花にもなっている。

林武《薔薇》(no.7)に描かれたバラは、油絵具をたっぷりつけた大胆で動きある筆致の中にも、花びら一枚一枚の重なりを感じさせるもの。黒く太い輪郭線がデフォルメされた形態を際立たせ、同時に原色ばかりの激しい画面を引き締めている。朝井閑右衛門《バラ》(no.8)も、油彩でざっくりとした筆致を用いながら花瓶に活けられた花の量感を表現し、ピンクや黄色といった花色も目に鮮やかである。絹谷幸二の《薔薇》(no.9)はプレスコ画によるもので、絵具の特性上、照りのある油彩とは異なる乾いた質感をもつ。花や蕾、葉が一体となった塊の中に赤・緑・青・紫・黄と補色同士が混在するものの違和感はなく、絹谷独自の色彩感が発揮されている。鈴木信太郎《ばら》(no.10)は一見幼くてらしいの無い筆致と構図の中に素朴な魅力があり、愛らしい花柄のテーブルクロスの上に、果物籠と共に置かれたバラの花瓶には、メルヘンチックな雰囲気まで漂う。

夏の花 (シャクヤク、ケシ、アジサイ、ユリ、キキョウ、ゼラニウム、ハス、アサガオ、ヒマワリ)

【アジサイ／紫陽花／Hydrangea】

ユキノシタ科アジサイ属の落葉低木。アジサイの仲間には、枝先にたくさんの花がまとまって咲く集合花。ガクアジサイの場合、中心に小さな粒状の花が密集し、花弁らしきものがついた花が額縁状に囲む。花弁のように見える部分は、じつは異常に発達した萼(がく)であり、このような特殊な花を装飾花とよぶ。一方、ガクアジサイの全ての花が装飾花に変化した品種のアジサイは、花の毬のようにたわわに咲く。種子はほとんどできないが、人為的に挿し木で殖やせる。アジサイの仲間の大きな特徴は、同じ品種でも土壌によって花色が変わることである。これは、根から吸収されるアルミニウムの量が花色に影響するため、アルミニウムが溶け出しやすい酸性土壌では青色系の発色がよくなり、溶けにくい中性やアルカリ性土壌では赤色が強くなる。

福山出身で日展を中心に活躍した洋画家・緒方亮平《紫陽花》(no.17)は、2人の女性のいる室内風景であるが、中央奥の庭先に薄紫色のアジサイが見える。そうと判るのは色合いや形状によってのみで、決して詳細に描写されている訳ではないものの、このアジサイがあることによって一気に絵の中の世界に季節感が宿る。タイトル通り、アジサイが本作のキーポイントとなっている。

【ハス／蓮／Lotus】

ハス科の多年生水草で、インド原産といわれる。池沼や水田などの泥の中に伸びた根茎から長い葉柄が水面上に抜き出て、楕形の大きな葉が現れる。真夏の早朝、花柄の先に高い芳香を放つ花が開花。晩秋には肥厚した根茎がレンコンとして収穫される。花の中央部に逆円錐形で蜂の巣状の花托(かたく)があり、穴の中に果実ができる。ハスはレンコンが食されるほかにも、葉は刻んでご飯にまぜたり、実はお菓子にして食べたり、止血用などの薬にもなるなど、余すところなく利用される有用植物である。また、ハスといえば仏教の花という

第1室：ふくやま美術植物園 ～アートにみる四季の花々～

*は寄託作品

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
1	森谷南人子	(1889-1981)	椿		木版、紙	22.9 × 17.4
2	金島桂華	(1892-1974)	椿		紙本着色	118.0 × 31.5
3	中川一政	(1893-1991)	ツバキ		油彩、カンヴァス	59.3 × 48.5
4	藤井治子	(1924-)	花見	1981	紙本着色	173.0 × 220.0
5	白瀧幾之助	(1873-1960)	チューリップ	1905-10 頃	油彩、カンヴァス	45.2 × 32.8
6	吉原英雄	(1931-2007)	5本のチューリップ	1984	エッチング・アクアチント、紙	59.8 × 90.7
7	林 武	(1896-1975)	薔薇		油彩、カンヴァス	40.0 × 31.0
8	朝井閑右衛門	(1901-1983)	バラ		油彩、カンヴァス	40.0 × 31.0
9	絹谷幸二	(1943-)	薔薇		フレスコ、カンヴァス	44.0 × 52.0
10	鈴木信太郎	(1895-1989)	ばら		油彩、カンヴァス	60.0 × 49.0
11	大島祥丘	(1907-1996)	牡丹	1988	紙本着色	162.0 × 112.0
12	作者不詳	-	姫谷焼色絵牡丹文皿	17世紀後半	磁器	15.0 × 15.0 × 2.2
13	野田弘志	(1936-)	牡丹	1988	油彩、板	44.5 × 44.5
14	山口華楊	(1899-1984)	芍薬		紙本着色	31.5 × 40.5
15	須田国太郎	(1891-1961)	芍薬	1941	油彩、カンヴァス	90.0 × 72.0
16	大村廣陽	(1891-1983)	芥子図		紙本着色	148.5 × 85.0
17	緒方亮平	(1901-1979)	紫陽花	1972	油彩、カンヴァス	130.5 × 97.2
18	梅原龍三郎	(1888-1986)	百合	1973	油彩、カンヴァス、板	45.7 × 38.0
19	奥田元宋	(1912-2003)	夏瓶(百合)		紙本着色	57.5 × 34.5
20	福田恵一	(1895-1956)	桔梗	1940年代	紙本着色	27.0 × 24.0
21	古庵千恵子	(1933-)	絵唐津写桔梗文菓子器	1993	陶	22.5 × 22.5 × 2.6
22	佐々田憲一郎	(1899-1995)	ゼラニウム	1923	油彩、カンヴァス	38.2 × 45.4
23	塩出英雄	(1912-2001)	蓮(習作)	1931	紙本着色	137.0 × 66.5
24	小林徳三郎	(1884-1949)	朝顔図	1940年代	紙本着色	50.0 × 87.0
25	高橋 秀	(1930-)	ひまわりのある静物	1951	油彩、カンヴァス	53.0 × 65.2
26	ジャコモ・バッラ	(1871-1958)	百日草の習作	1920	パステル素描、支那紙	22.0 × 30.0
27	杉本健吉	(1905-2004)	白芙蓉		紙本墨画	39.7 × 30.5
28	武田五一	(1872-1938)	芙蓉・薄・菊		絹本淡彩	142.5 × 45.5
29	吉田 卓	(1897-1929)	コスモス	1923	水彩、紙	27.0 × 20.7
30	佐藤良男	(1924-1999)	菊の花	1972 頃	油彩、カンヴァス	54.0 × 43.0
31	樂 惺入	(1887-1944)	黒樂菊置上茶碗 銘 菊慈童	1928	陶	11.8 × 11.8 × 5.4
32	岡田清光	(1917-2000 頃)	菊文銅蟲蓋置	1993	銅	5.5 × 5.5 × 6.0
33	井伏圭介	(1930-2006)	菊文打出箱	1991	銀に打出、木	9.5 × 22.3 × 10.0
34	藤井厚二	(1888-1938)	茶碗 水仙	1930年代	陶	12.8 × 12.8 × 8.9
35	藤井松林	(1824-1894)	紅梅春鶯図	1873 頃	紙本着色	127.5 × 49.5
36	藤井松山	(1880-1967)	梅と庵	1960 頃	紙本墨画、淡彩	67.2 × 23.5

第2室：日本の近現代美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
37	高橋 秀		ブルーボール# 101	1971	油彩、カンヴァス	142.0 × 190.0
38	巖 嘔	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩、木	75.0 × 45.0 × 50.0
39	山口長男	(1902-1983)	壺形	1959	油彩、合板	183.0 × 274.0
40	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩、カンヴァス	33.6 × 45.7
41	岸田劉生		新富座幕台之写生	1923	油彩、カンヴァス	31.9 × 41.0
42	岸田劉生		晩春の草道	1918	油彩、カンヴァス	45.0 × 36.0
43	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩、カンヴァス	47.2 × 24.8
44	吉田 卓		自画像	1919	油彩、カンヴァス	33.0 × 23.5
45	白瀧幾之助		帽子の婦人	1905-10 頃	油彩、カンヴァス	72.3 × 53.0

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
46	南 薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩、カンヴァス	116.7 × 91.0
47	林 武		妻の像	1927	油彩、カンヴァス	90.9 × 72.7
48	梅原龍三郎		ピワ	1947頃	デトランプ、紙	37.5 × 65.0
49	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩、カンヴァス	89.3 × 72.8
50	小磯良平	(1903-1988)	婦人像	1969	油彩、カンヴァス	52.0 × 44.0
51	熊谷守一	(1880-1977)	女の顔	1931	油彩、板	41.0 × 32.0
52	藤井松林		四季花鳥図屏風		絹本着色	(各) 132.5 × 365.5
53	松本陽子	(1936-)	ペイルシエバの荒野	1990	アクリル、カンヴァス	200.0 × 250.0
54	高松次郎	(1936-1998)	形(No.1201)	1987	油彩、カンヴァス	218.0 × 182.0
55	野田弘志		ガラスと骨II	1990	油彩、アクリル下地、カンヴァス	146.0 × 112.0
56	小林徳三郎		花と少年	1931	油彩、カンヴァス	53.1 × 65.0
57	河井寛次郎	(1890-1966)	海鼠瓜壺	1930頃	陶	25.0 × 16.0 × 16.0
58	北大路魯山人	(1883-1959)	金銀彩武蔵野鉢	1925-1934	陶	15.2 × 27.5 × 27.5
59	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入	1964	陶	20.0 × 13.0 × 11.0
60	樂吉左衛門	(1949-)	黒樂茶碗 銘夜聴	2003	陶	9.3 × 13.0 × 13.0
61	堀内正和	(1911-2001)	線C	1954	鉄	45.0 × 78.0 × 46.0
62	土谷 武	(1926-2004)	植物空間VI	1990	鉄	64.0 × 57.5 × 41.5

第3室：ヨーロッパ美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
63	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩、板	51.0 × 65.0
64	アルベール・マルケ	(1875-1947)	停泊船、曇り空	1922	油彩、カンヴァス	38.4 × 46.0
65	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	近衛騎兵(17,18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩、パネル	81.0 × 60.0
66	パブロ・ピカソ		りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩、カンヴァス	16.0 × 22.0
67	ギュスターヴ・クールベ	(1819-1877)	波	1869	油彩、カンヴァス	34.5 × 51.8
68	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩、カンヴァス	49.0 × 72.0
69	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩、カンヴァス	120.0 × 87.0
70	メダルド・ロッシ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス、石膏	37.0 × 30.0 × 17.0
71	ウジェーヌ・カリエール	(1849-1906)	腕組みの座る女		油彩、カンヴァス	46.0 × 38.0
72	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩、カンヴァス	60.0 × 47.0
73	クルト・シュヴィッターズ	(1887-1948)	抽象 19 (ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩、厚紙	69.5 × 49.8
74	ジュゼッペ・カボグロッシ	(1900-1972)	Sup.671	1958	グワッシュ、紙	71.0 × 50.0
75	ジャコモ・パッラ		輪を持つ女の子	1915	油彩、カンヴァス	51.0 × 60.5
76	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩、カンヴァス	80.0 × 60.0
77	ソーニャ・ドローネー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩、カンヴァス	100.0 × 220.0
78	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩、パステル、紙、カンヴァス	194.0 × 150.0
79	ルチオ・フォンタナ	(1899-1968)	空間概念-銀のヴェネツィア	1961	油彩、ガラス、カンヴァス	60.0 × 50.0
80	ピエロ・マンゾーニ	(1888-1978)	アクローム	1961	小石、カンヴァス	70.0 × 50.0
81	ペリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風(踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0 × 80.0 × 90.0

和室展示：松本コレクション「花」

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
82	樂 長入	(1714-1770)	黒樂金彩玉の絵茶碗	江戸時代	陶	8.6 × 9.3 × 9.3
83	尾形乾山	(1663-1743)	錆絵火入	江戸時代	陶	10.4 × 11.0 × 11.0
84	尾形乾山		詩入錆絵長角皿	江戸時代	陶	2.7 × 18.7 × 11.0
85	永樂保全	(1795-1854)	了々斎好 菊絵八角菓子盆	江戸時代	桐材	5.0 × 26.2 × 26.2

印象が定着しており、仏像が安置される蓮華座や光背に配された蓮華文をはじめ、寺院や仏具の装飾などにも多く見られる。汚れた泥の中からでも花を咲かせるハスは、極楽浄土に咲く清浄な花として象徴的に扱われた。

塩出英雄の《蓮（習作）》(no.23)は、大きく青々とした葉が茂る中に、薄紅色の蓮花が美しい。花の輪郭や花弁の筋、葉脈も繊細な描線が引かれ、習作としながらもハスの持つ凛とした品格がよく表れた端正な作品となっている。

【ヒマワリ／向日葵／Sunflower】

キク科ヒマワリ属の一年草または多年草。北アメリカ西部原産で、日本へは17世紀後半に渡来した。春に種子を播いて、7～8月には草丈最大3m程にも達する大型の草本。ひとつの花のように見える部分は、数百の花が集まった集合体で、このような構造の花を頭花（とうか）という。ヒマワリ属の学名ヘリアンスは、ギリシア語で「太陽の花」、英名のサンフラワーも同様の意味である。ちなみに「向日葵」の文字は、漢名をそのままあてたものであり、古今東西、人はこの花から太陽を連想したようである。花が太陽の動きに合わせて向きを変えともいわれるが、それは俗説。蕾のうちは向きを変えるものの、開花してからはたいてい東を向いている。多くの園芸品種があり、このうちロシアヒマワリは、種子を食用油やナッツに利用するため、大規模に栽培されている。

長年イタリアで活動した現代美術家・高橋秀による初期の作品《ひまわりのある静物》(no.25)は、ヒマワリのもつ「太陽を好む元気な花」のイメージとは裏腹に、暗い色調でまとめられた画面からどこか重々しい空気が漂う。籠の中の手折られたヒマワリの枝は、脇に置かれた灯のないランプが暗示するように、萎れて生命感がない。まばゆいばかりに咲き誇る花にも必ず終焉が訪れる、そんな絶対的真理を伝えるかのような作品である。

秋の花（ヒャクニチソウ、フヨウ、コスモス、キク）

【フヨウ／芙蓉／Cotton rose】

アオイ科フヨウ属の落葉低木。中国中部原産ともいわれるが、沖縄、四国、九州の海岸に近い林縁などに自生が見られる。比較的耐寒性はあるが、寒地では冬に地上部が枯れ、宿根草のようになる。朝開いて夕方しぼむ一日花で、夕方近くになると花色が濃くなる。それが顕著なのが「酔芙蓉」と呼ばれる変種である。開花直後は白だが、だんだん淡紅色から赤へと変化し、夕方にはしぼんでしまう。フヨウの学名はハイビスカス・ムタビリスというが、ムタビリスはラテン語で「変わりやすい」の意で、花色の変化に由来する。

杉本健吉《白芙蓉》(no.27)は、壺に活けられたフヨウの花を、墨画で描き出す。用いられているのは墨一色であるが、その濃淡によって丸みを帯びた壺の立体感や、花の白さが伝わってくる。建築家・大学教授職の傍ら余技として絵画やデザインも手掛けた武田五一の《芙蓉・薄・菊》(no.28)では、薄の穂や小菊と共に、薄紅色の花をつけたフヨウの株が描かれる。こちらも墨で表された、フヨウ独特の星形をした葉が、画面にアクセントを添える。

【キク／菊／Chrysanthemum】

キク科キク属の総称として呼ばれることもあるが、一般には観賞用の栽培ギクを指す。奈良時代から平安時代初期頃に中国から渡来したと考えられている。日本皇室の御紋章としても知られるキクの意匠は、長寿吉祥の文様として好まれ、様々な工芸作品の題材に用いられた。あるいは、春夏秋冬の花々などを順に配して四季を表す「四季草花図」などに、秋を代表する花として描かれた。中国・周時代、王に仕えた慈童が過ちを犯して山中に流されたが、キクの葉から滴る露が霊薬となり、これを飲んで七百年経っても少年のまま生きながらえたという「菊慈童」の伝承は、絵画や工芸などの題材にしばしば取り入れられる。

高校教員として勤務の後、当時新設であった広島県立美術館や呉市立美術館で要職を歴任した佐藤良男の《菊の花》(no.30)は、花瓶に活けられた紫、黄、白、赤色の大小の菊花を、簡略な筆致ながらリアルに描き出す。樂惺入《黒樂菊置上茶碗 銘 菊慈童》(no.31)では、「菊慈童」の伝承を黒地に白菊の型押し文様のみで象徴的に表現している。岡田清光《菊文銅蟲蓋置》(no.32)は、広島伝統工芸品・銅蟲（どうちゅう、銅板を槌で叩いて整形した器）にシンプルな菊花の図案をあしらったもの、井伏圭介《菊文打出箱》(no.33)は精巧に作り上げ



18. 梅原龍三郎《百合》【ユリ】



23. 塩出英雄《蓮（習作）》【ハス】



24. 小林徳三郎《朝顔図》【アサガオ】



25. 高橋秀《ひまわりのある静物》【ヒマワリ】



27. 杉本健吉《白芙蓉》【フヨウ】



29. 吉田卓《コスモス》【コスモス】



33. 井伏圭介《菊文打出箱》【キク】



34. 藤井厚二《茶碗水仙》【スイセン】

た銀細工による菊を木箱の全面にあしらったもので、それぞれにキクというモチーフを工芸の中で表現している。

冬の花（スイセン、ウメ）

【スイセン／水仙／Narcissus】

ヒガンバナ科スイセン属の球根植物で、地中海沿岸や北アフリカなどが原産。数多くの園芸品種が作出・栽培されており、そのうち日本水仙は12月頃から咲きはじめ、雪の中でも芳香を漂わせることでなじみ深い。しかし、日本水仙もその名に反して地中海沿岸地域の原産であり、シルクロードを経て中国へ伝わり平安末期頃、日本にもたらされたと考えられている。桃山時代になると、スイセンは生け花や茶花（茶席に飾る花）として愛用されるようになり、以降、陶芸・金工・染織の意匠などとしても用いられる。その一方で、絵画においては各種の「四季花鳥図」の中で冬を示す花の一つとして登場することはあったが、単独の主題として扱われることは、近現代に至るまで少なかったようである。

福山出身で建築家業の傍ら陶芸も手掛けた藤井厚二の《茶碗 水仙》(no.34)は、側面に一株のスイセンがあしらわれた茶碗である。ここでのスイセンは工芸によく見られる簡略化・象徴化された文様としてではなく、その姿がごくありのままに、まるで色紙に描きつけるように絵付けされている。藤井は他にも季節の花々をテーマとした茶碗などを多数制作している。

【ウメ／梅／Plum】

バラ科サクラ属の落葉高木で、葉に先だって香り高い花が咲く。中国原産であり、奈良時代以前に遣唐使等によって中国文化と共に渡来したとされる。日本人の生活に身近な植物であり、梅干しや梅酒など食用の実梅と観賞用の花梅とに分けられる。厳しい寒さの中でも気高く花を咲かせるウメと、常緑を保つ松・竹は歳寒三友と称され、江戸時代に吉祥文様の代表として慶事で欠かせない存在になると共に、文人画の画題としても好まれた。また、学問の神として信仰される菅原道真を祀る福岡・大宰府天満宮をはじめ、全国の天満宮では、道真が愛したウメが紋章となっている。

幕末から明治にかけて福山で活動した円山派の絵師・藤井松林による《紅梅春鶯図》(no.35)に描かれたウメは、勢いよく上へ上へと跳ね上がる枝が簡略な筆致で表現される。掛け幅の縦長画面で切り取られたウメの枝と、枝先に配されたウグイスとが、絶妙なバランスを築いている。幼少時に松林に師事し、京都で同じく円山派を修得した藤井松山の《梅と庵》(no.36)では、茅葺屋根の家屋と傍らに花咲くウメの木が描かれ、早春ののどかな山里の風情が漂っている。

結びに

以上に見てきたように、所蔵品で四季折々の花めぐりを行うことができる。同じ種類の花をモチーフにした作品でも、材料や技法によって、そして何より個々の作家の花に対する捉え方やそれを表現するスタイルによって、全く異なる印象をもつものとなる。

近代以降の画家たちの中で、花を描いたことのない者は、おそらくいない。絵画の領域でなくても、陶器への絵付けやその他工芸作品に施す文様となれば、花や植物をモチーフにしたものがまず登場する。それは、花が人びとの生活の中で常に身近な存在であり、なおかつ「生きとし生けるもの」全ての中で、動かさず気兼ねもいらす最も手軽にモデルになってもらえる存在でもあるからかもしれない。

本展では、そんな身近な花たちが登場する美術作品に焦点を当て、それらの植生や芸術文化との関わりにも触れつつ紹介してみた。会場にて描かれた花を愛で、学び、さながら植物園にいるような気分になって頂ければ幸いである。

(学芸員 安部すみれ)

主な参考文献

- ・展覧会図録「特別展 花」東京国立博物館、1995年
- ・同「花と緑の名品展—自然との対話—」石川県立美術館、2001年
- ・同「花物語—日本近現代絵画にみる花の表現—」刈谷市美術館、2004年
- ・同「花とともに—日本美術の500年／室町時代から現代まで—」島根県立石見美術館、2010年
- ・「週刊 四季花めぐり」シリーズ 小学館、2002～03年